飛翔な日々

〜飛翔編集員のぼやき〜

「手書き文字フェチ」

私は人の手で書かれた文字を見ることが好きだ。たとえばミュー私は人の手で書かれた文字を見ることが好きだ。たとえばミュージックビデオの中で歌手が自らの手でペンを持って歌詞を書くシージックビデオの中で歌手が自らの手でペンを持って歌詞を書くシー

人が書く文字は不思議と書く人の人柄を体現しているような気が 内が書く文字は下悪議と書く人の人柄を体現しているような気が 人が書く文字は不思議と書く人の人柄を体現しているような気が あると「この人こんな字を書きそうだな、わかるな~」と る機会があると「この人こんな字を書きそうだな、わかるな~」と る機会があると「この人こんな字を書きそうだな、わかるな~」と る機会があると「この人こんな字を書きそうだな、わかるな~」と か得してしまう。

確かに、大量の履歴書をチェックしなければならない企業の立場で手書き履歴書の文化は効率が悪いと発言したことが話題になった。少し前の話になるが、日本で活動するアメリカ人の芸人が日本の

くのかもしれない。

さのかもしれない。

さのかもしれない。

さのかもしれない。

さのかもしれない。

さのかもしれない。

さのかもしれない。

はのかもしれない。

さのかもしれない。

さのかもしれない。

温かみを感じる。 が、 すます手書きというものは淘汰されていくのだろう。 ている。 私は離れた地に住む友人と小学生の時から今までずっと文通を続け そのことに少し寂しさを感じる。だからというわけではないのだが ニケーション手段はLINEなどのメッセージサービスやメールに移行 たが、高校生、大学生と年齢を重ねていくとともに友人とのコミュ 交換日記をしたりして友人の手書き文字を目にする機会は多々あっ ところで考えてみても小・中学生の頃は友人と手紙を渡し合ったり していき、そのような機会は激減してしまった。 この履歴書という例を取ってみてもわかるように、恐らく今後ま あの頃と変わらない彼女の様子を思い起こさせてくれるようで 彼女が書く文字は小学生の時以来あまり変化が見られない だから私は手書き文字が好きなのだと思う。 私のような人間は 自分の身近な

る。 (27生 吉川 瑠美)の人の手書き文字に出会うことができたらいいなぁとも思うのである限り手書きを選んでいきたいと思うし、またこれからもたくさんる限り手書き文字フェチ」としてはどれだけデジタル化が進ん一介の「手書き文字フェチ」としてはどれだけデジタル化が進ん

4.6

パーリーピーポー」

る。 ますよの赤い線が出るような歪んだ日本語で反論したことをご容赦 うだ。なぜ他人に遊ぶ回数まで制限されなければならないのか。 全部正真正銘の白歯である。服装もこの言葉が抱かせる想像のよう セサリーをジャラつかせ、 るだろう。 で長々とパーリーピーポーについて論じてきたが最後にこれだけは かみんなも見えていないところで遊んでるくね? Word に間違って れるかを自分なりに推察したところ、 な服は着たことがない。 っている。 な想像を湧かせるパーリーピーポーという非常にファンキーモンキ な、片方の前歯が金歯であるような人を想像したと思う。 葉の意味を説明するが、 ーな言葉がなぜか、ごく一部の人々からだけであるが私の蔑称とな いたいがこれが1パーリーピーポーとしての反論である。これま パーリーピーポーと揶揄されている。 この言葉を聞いたときに、どのような風貌、 常に馬鹿げた言葉である。 決して自分の風貌を匡正しているわけではないが前歯は 多くの人はサングラス、ダブダブの衣類をまとい、 この揶揄のされ方、 しかし一部の過激派からはパーリーピーポ パーリーが好きなピーポーという意味であ ドクロと三代目 J Soul Brothers が好き 嫌いじゃない 意味を知らない人のために、この言 人と遊ぶことが多いからのよ なぜそのような言葉で呼ば 人相の人を想像す そのよう アク て

(27生 中村 励)

おじいちゃんガム」

回は、私の相棒おじいちゃんガムについて話していこう。やいる状態が普通になってしまっている。私とよく一緒にいる人は、強中・暇な時はガムを取り出し、食べている。最近はガムを食べて強中・暇な時はガムを取り出し、食べている。授業終わり・食後・勉

「それおじいちゃんが食べる奴だ~」 そのガムは、爽やかなミントの香りを放ち、お口の中を爽やかに もる日、私がいつものようにガムを取り出すと、友達が言った。 は、なぜ「おじいちゃんガム」と呼ぶのか、その本題に入ろう。 は、なぜ「おじいちゃんガム」と呼ぶのか、その本題に入ろう。 ある日、私がいつものようにガムを取り出すと、友達が言った。 でれおじいちゃんが食べる奴だ~」

欲しくなった人がいたら、遠慮なく連絡してほしい。 追ってくる者もいて大変である。読者の中にもおじいちゃんガムが近では中毒者が出るほどの人気ぶりだ。何かあるたびに私にガムをおじいちゃんガムという名前から軽視されがちではあったが、最おじいちゃんガム誕生の瞬間である。理由はこれだけだ。

からでは遅いのだ。私はこれからも強く訴えていきたい。しい。愛する家族・友達の顔を思い出してほしい。地獄で反省してやめられないループに嵌って人生を台無しにする前によく考えてほしかし、すぐにその刺激の虜になるであろう。引き返すなら今だ。

おじいちゃんガムの益々の発展を祈って、飛翔の日々とする。

(27生 堀田 悠輔)

静岡放浪につけて」

ろが多く、とても新鮮だった。初めて降り立った静岡は、自分が思っていたものと大きく違うとこれと知り合いに輸送されて、はるばる静岡へ行くことがあった。

かい。 じゃなくてあくまでただドナドナされただけである。 て得られる気づき、 と考えていたので、 寒く、静岡はそこからさらに北にあるためものすごく寒いのだろう こで雪を落とすためである。 れるほどであった。 んやり突っ立っていた間とても暖かく、 そういった抽象的な話ではなく、そもそも感じる日差しがとても暖 まず、 私が静岡を訪れたのは二月の末のことであるが、静岡 IC でぼ 日の光が暖かい。 これも旅の醍醐味であるだろう。 北から吹く風が中部地方の山々にぶつかり、 予想とは違っていて驚いた。行ってみてはじめ 気温が高いとか、 普段暮らす広島や実家の奈良はとても マフラーが鬱陶しく感じら 体感温度が高いとか、 でも今回は旅

私はこの三島市に二日間滞在した。私が三島市に着いて、まず。と速道路の沼津 IC からも近く、非常にアクセスのよい町となっている。海道新幹線や、『伊豆箱根鉄道』といった私鉄も通っている。東名高二つ目は、私がドナドナされた町三島市についてだ。三島市は、二の目は、私がドナドナされた町三島市についてだ。三島市は、

だ。 交通の便がよく、 どの衝撃だった。三島を中心に活動していたひとによると、 りにとても飲食店、 思われた。 達した温泉街も多く、 うな賑わいを見せる三島の街は、 が殆どシャッター街と化してしまった町が多く存在する中、このよ どこの通りに行っても飲み屋がある。最近は景気の影響もあり駅前 ても賑やかな町であるという印象を受けた。というのも、 のように飲食店が多く存在するらしい。 しかし、集客数の低下により、 蛇足だが、 静岡県は熱海市や伊東市などの高度経済成長期に発 様々な方角から人が行き来できる土地なので、 正確に言うと飲み屋やガールズバ これらの地域も飲食街が多いように感じた。 昔ほどの賑わいはあまりないように 自分にとってショックと言えるほ なるほど西条とは違うわけ ーが多い 駅前 のだ。

静岡は、いいぞ。

(27生 上田 朋子)

僕の遅刻半生」

る。以下、僕の半生と遅刻との関わりについて述べる。 り込み、そして真っ暗な体育館倉庫に閉じ込められていたものであり込み、そして真っ暗な体育館倉庫に閉じ込められていたものであく。 僕が初めて遅刻したのは、保育園の時であった。この頃は家で

ことは少なかったが、彼の卒業と同時に僕が集合時間に間に合わな小学校低学年の時には兄が分団長をしていたため比較的遅刻する

なく、 実際そう甘くはなく、瀬戸際が内申書に書かれる文字通りの 朝練とは、 年を追うごとに遅刻の割合も増えていった。毎年某部活を全国大会 に移行しただけであった。その状態は高校生になっても引き続き、 しかしそこでも時間に間に合うか間に合わないかの瀬戸際にいたの スは変わらなかった。しかしここで「朝練」という概念に遭遇する。 論の場が設けられることもあった。 った同学年の友達からの不信感が募っていき、 でも僕の登校スタイルに改善はなかった。この時から幼なじみであ るとも劣らない遅刻癖を持っていたという前例があったため、 副分団長をやらなければならなかったのだが、 の文章をご覧になっている可能性もあるので割愛させていただく 導く恐ろしい形相をした体育教師が玄関に待ち構えていたとして 集合時間を自分たちで設定する。)少しばかり持久走に覚えがある 長いスパンで考えた時、 つこうと走っていたからかもしれない。高学年になると分団長や って登校する集団を ことが増えていった。 その恐怖に慣れた。 中学になると多くの人が毎日朝練に出向いていた。 毎朝今では考えられない早起きをして朝練に行ったものだ。 毎日のように重たいランドセルを背負って前を歩く分団に追 部活を引退すると余裕ができるものと思うかもしれないが 朝7時半前から部活動に励むという非常に恐ろしい行為 「分団」と呼び、 (同じ地区に住む子どもたちで構成され、 大学になってからのことは、 遅刻はしない方が何かと都合がいい。 中学生になっても、 各分団は学校への距離に合 僕の遅刻に関して議 前副分団長が僕に勝 教員の方々が 僕も例外で 僕のスタン لىلى 固 年。

れるのか、と。

たらダメだ。 ということである。遅刻をしてきて早15に生活せねばならない」ということである。遅刻をしてきて早15に生活せねばならない」ということである。遅刻をしてきて早15年。僕というものを語る上で遅刻は切っても切り離せない存在なの年。僕というものを語る上で遅刻は切っても切り離せない存在なのに生活せねばならない」ということは「これからも遅刻と共

(27生 佐藤 大志)

編集後記

今回の飛翔編集では、初めて校外へ取材に出かけました。私は取材交渉が苦手で、お店に入る前には決まって躊躇していましたが、お店の方々が快く応じてくださいました。校内・学部内だけでなく、西条の町の温かみを感じることのできるいい機会をいただいたと思っています。また、今回は大学に入って初めて、まとめ役の仕事をさせてもらいました。編集員のみんなにたくさん手伝ってもらって、ようやくそれっぽい任務を果たせたのではないかと思います・・・みんなの文章に刺激を受けながら、次号もしっかり働きます!!

編集長 27 生 永原 花菜

先輩方が引退されてから、27 だけで作成した初めての『飛翔』。戸惑うこともわからないこともありましたが、多くの 方々の助けを得て完成させることができました。これからは、もうすぐ入学する 28 とより良い『飛翔』作りのために何 ができるかを模索していこうと思っています。たくさんの人々がこの『飛翔』を手にとってくれることを願って…。

副編集長 27 生 小川 真里奈

2回目の編集作業、前回に続いて大変でした!インタビュー日時の決定から原稿確認まで長い道のりでした。でもそれだけ大変だからこそ、飛翔のやりがいが感じられるのだと思います。今回も 0BOG を担当させてもらって、非常に為になる話ばかりでした!普段の大学生活だけでは広げられない人脈を作れるのが、飛翔の良さだと思います。

副編集長 27 生 堀田 悠輔

飛翔の編集は、色々気づくことが多く毎回精神的ダメージが重い。今年こそは創造的に楽しく生活したいです。

27 生 上田 朋子

今回は初めて27生だけでこの飛翔を作らせていただきました。テスト前に編集とかぶり大変な時期もありましたが、 終わった後の達成感は言葉に言い表せないものでした。協力してくださった事務の方々、インタビュイーの方々、そして ここまで読んで下さった読者の皆さんに感謝の意を捧げます。

27 生 小川 巧

今回の飛翔の編集にあたって、前回よりもより深く関われたように思います。充実 した時間を過ごさせていただくと同時に、今まで気づかなかった飛翔の魅力に気づくこともできました。師走、テスト期間と忙しい時期でもこころよくインタビューをお受けしてくださった並木先生、渡邊さんに心より感謝します。また、同様に忙しいながらも一緒に記事を書いてくださった小川君、堀田君をはじめ、メンバーの皆さんにも感謝でいっぱいです。最後に、これを読んでくださる皆様へ、楽しんでください。

27 生 大崎 壮巳

編集後記

前期、後期と一年間通して飛翔の編集に携わり、たくさんの人や場所に出会いました。受動的な私にとって、取材とい う目的がなければそれらの出会いはなかったと思います。しかし一度その楽しさを知ってしまえばもっとしたいと思うの が人情です。これから、広大内や西条という町の中でももちろん他の土地でもたくさんの出会いを体験していきたいと思 います。そのきっかけを与えてくれた飛翔には感謝です。

27 生 吉川 瑠美

2回目の飛翔編集もやはりが切をぎりぎりまで引き延ばしてもらうこととなってしまい、自分の甘さを実感しました。 しかしながら以前の反省を生かして1回目より多くのものを得ることができた編集作業であったと思います。研究室紹介 では自分の興味のある分野についてのお話をたくさん聞かせていただき、特集ではまだ知らなかった西条の魅力を発見す ることができました。インタビューに協力してくださった皆様、飛翔編集に携わった全ての方々、本当にありがとうござ いました。この「飛翔」が少しでも皆様の心に何かを残せたら幸いです

27 生 溝口 奈都

まずはじめに、編集長並びにレイアウトに携わった方々〆切という〆切を破って申し訳ありません。さいごにこの飛翔 に携わることで自分のスキルが今が 47 だったら、54 くらいまでアップしたと思います。ありがとうございました。飛翔 な日々是非読んでください。

27 生 中村 励

総合科学部誕生よりある飛翔の歴史の一端に携われたことに感謝。この度お世話になりましたすべての関係者様に感謝。 27 生 佐藤 大志

飛翔の編集に携わらせていただくのは2回目でしたが、まだまだ不慣れなことが多かったです。しかし、自分の伝えたいことが記事にできる喜び、教授から直接お話しを伺うことができる貴重な機会、インタビューにとってできたつながりなど、普通に大学生活を送っていては出来ない経験を沢山させていただきました。文章で人に伝えることの楽しさに改めて気がついたのでこれからも続けていきたいと思います。ご協力してくださった方々、ありがとうございました。

27 生 古川 幸実

あっという間の一年でした!大学入学時の好奇心旺盛な気持ちを忘れず、そして、飛翔を通し出会った方々の言葉を胸に、二年生になります。新しい出会いが楽しみです。ご協力頂いた皆様ありがとうございました。

27 生 森 みずき

編集後記

私は後期から飛翔の編集に携わりたいと思い、参加しました。先生や先輩方への取材依頼、文字起こしなど初めての経験ばかりでしたが、「他の人がやっていないことをしている」と考えると不思議とやる気が湧きました。実際にインタビューをして自分の考えが改まったり意識を変えていこうと思えました。ありがとうございました。

27 生 三好 香乃

今回の飛翔の編集に携わって日程調整やインタビューなど様々なことを勉強させていただきました。また何かの機会に この経験を活かせればと思います。

27 生 清丸 峻

今回, OB・OG 紹介で取り上げられた衣松君は,私の研究室の卒業生です。彼の記事を読むと,「彼が,学生時代にしっかりした目的意識を持って過ごしていたんだな」ということを改めて理解するとともに,総科で過ごした日々が,現在の仕事や彼の持つ価値観の形成に,少しは貢献できたような気がして,嬉しく思いました。飛翔が在校生のキャンパスライフの充実に役に立てれば何よりです。

広報・出版委員会(飛翔担当) 和田 正信

『飛翔』第89号、楽しく読ませて頂きました。三つの領域の「研究室紹介」は研究内容が多岐にわたっていて、総合科学部の縮図のようです。Skaer 先生へのインタビューは英語でなされたのでしょうから、担当の学生さんは普段以上の努力をされたことでしょう。また、浮穴先生と巻頭の船瀬先生がともに「自分自身を創造する」ことの大切さを語っておられるのが印象的でした。「総合科学部で輝いている人々」では、大学での学びを学外での活動に反映させている学生さんたちが紹介されて、刺激的でしたし、学生さんたちをとても頼もしく感じました。編集委員会のみなさんがいつもアンテナを張り巡らしてくれたお蔭で、総科の魅力が伝わってくる内容でした。

広報・出版委員会(飛翔担当) 的場 いづみ

Faculty of Integrated Arts and Sciences

